

月ノ光

竹内銃一郎

【登場人物】

K・カール ……謎の手品師
兄・グラックス ……Kの隣人。保険の外交員
妹・グレーテ ……グラックスの妹。俳優志望
愛人・レイン ……カールと逢びきを重ねる人妻
良人・ヨーゼフ ……レインの夫。銀行の支店長
刑事・ブルームフェルト ……K等と同じアパートの住人

能舞台は、橋掛かりだけが橋ではなく、舞台まるごとが橋であるらしい。

「橋」とはむろん、妖怪、精霊、亡霊等、ありとあらゆるモノたちが現れる「あやかしの場」であり、また、夢と現実、聖と俗、この世とあの世の、明確な区別のない、混沌とした揺れ動く「境界（はざま）」でもあるのだが、ところで、古今東西ありとあらゆる橋の中でもっとも驚嘆に値する橋といえば、ひとが渡ろうとした瞬間、「なんと橋が寝返りを打つ！」と書かれた、あのフランツ・カフカの短編小説「橋」をおいて他にあるまい。身を切られるように切ないが、それでいて思わずプツと吹き出してしまいそうな、滑稽でしかも危ない橋。さて。これから始まるお芝居の舞台Ⅱ橋が、もしもそんなナイーブな代物だとしたら、どうだろう？

1

ここはカールの部屋。夜。殺風景で構わないが、一九一九年という時代の匂いがどこかにほしい。

男がふたり。テーブル前の椅子に座っているのが、この部屋の住人で手品師のカール（以下K）。ベッドで横になっているのは、同じアパートに住む隣人、セールスマンのグラックス（以下兄）である。

部屋の隅にある机の上に鳥のいない鳥籠。窓から月の光が射し込んでいる。

K

（ランプを弄びながら）顔の形も髪の色だって違うんだよ。左の男の腕の太さなんて右側の男の太腿くらいあるんだから。だけどふたりは双子なんだ。俺には分かったんだ。ふたりとも左手の小指に包帯を巻いていて……。もちろん確かめはしなかったよ。だけど、双子でなきゃあんな真似はしない、普通はね。

ふたりの持ち上げた墓石がドスンと落ちて、土にめりこんでもう動かなくなったその時だよ。茂みから第三の男が現れたんだ。いきなりだったから俺も驚いたんだが、もっと驚いたことには、こいつはなんと芸術家なんだ。ひとめで分かったよ。頭にはベレー帽、右手には鉛筆。おまけに胸元をはだけているんだ。シャツのボタンをきちんとはめてないのさ。

真の芸術家は決断が早い。鉛筆を持った右手はすぐさま墓石に向かい、左手は石の表面を押さえ、いや、撫でていたのかもしれない、左手の動きがぴたと止まったと思う間もなく、右手の鉛筆はスルスルと石の上を滑りだす。見事な腕前だよ。金文字でまず「ここに眠る」と書き込んだ。さあ、次は？ そんな俺の期待に応えるように、男はさらに書き加えようとしたが、なにか不都合でも起きたのか急に鉛筆を置き、それからフーっと大きく息を吐いて俺の方に振り向いた。

芸術家先生はなんだかとても困った顔をしていたよ。さっきまでの自信に溢れた後ろ姿がまるで嘘だったみたいなのに、しよげ返っているんだ。そんな顔をされたらこっちだって困る。奇妙な光景だったと思うよ。困ったふたりが、困った困ったと心の中で呟きながら見詰めあっているんだから。（注①）

間の悪い時には間の悪いことが重なるもので、突然、墓地の礼拝堂の小さな鐘が鳴りだして、なぜかその時、俺は妙な胸騒ぎを覚えたんだ。それは …
どうしたんだ？

え？

終わりか、それで。

聞いてたのか。

聞いてたさ。

眠ってるのかと思ったよ。

蓋つきの耳は部屋に置いてきたんだ。

子守歌のつもりで話してたんだが …

自信がないんだ、寝顔には。それに …

なんだい？

言いたくないがこのシート

匂うか、やっぱり。

臭うどころか、こんなベッドで寝てるからそんなおかしな夢を見るんだ。

毎晩、ベッドで横になるたび思うんだ、明日は必ずシートを変えようって。でも、

朝になると何故かすっかり忘れてる。

きつと好きなんだよ、このシートの臭いが。だから別れられないんだ。

え？

？

いや、なにか、いまなにか重大なことに気がついたんだ。正確に言うと、重大なことを忘れてることに気がついたんだが。待てよ、いったいなにを忘れちゃってるんだ、俺は。

シートを取り替える前に、その忘れっぽい頭を取り替える必要があるかもしれない。

(くしゃみをして) ああ、冷えるな、今夜は。

亡くなった母がよく言ってた、月が大きく見える晩は寒くなるって。

くそつたれが！

カールはいきなり傍らにあった本を、壁に向かって投げつける。

兄 … (驚いて)

ネズミだよ。ほらそこ、穴があいてるだろ。この時間になるときまってあそこから顔を出すんだ。鳥籠を狙っているんだ、鳥なんかいないのに。バカな奴らだよ、もう少し気の利いた連中だと思っていたんだが、所詮、ネズミはネズミさ。そんなことだったのかい？

なにが？

兄 …
きみが忘れてたっていう …

K そうじゃないよ、そうじゃなくって、うん？ ちょっと待ってくれよ。ハ、ハ、
ハ（と、笑って）こりゃいいや。（と、鳥籠のそばに行き）いいかい。ここに鳥の
いない鳥籠がある。こうやって布を被せる。タネも仕掛けもございませぬ、てな
ことを言って指をひとつ鳴らし、パツと被せた布を取ると、
兄 分かった、鳥籠の中にネズミがいるんだ。
K グラックス、この際だからハッキリ言っておく。俺の手品はそんな子供騙しなん
かじゃない。パチンと指を鳴らしてパツと布を取ると、なんと鳥の中に鳥籠が入
っているんだ。
兄 ？ なんだって？
K ふん、驚いてるな。
兄 布を取るとどうなってるって？
K だから、鳥籠の中に鳥が入ってるんじゃないかって、鳥の中に鳥籠が入ってるんだよ。
そうだ、もうひとひねりして、鳥の中に入ってる鳥籠の中には鳥がいて、その鳥
の中にも鳥籠があるんだ。そしてその鳥籠の中にも鳥がいて、その鳥の中にもや
っぱり鳥籠があるとすると…、ずいぶん大仕掛けになりそうだな、ええつと、こ
こまでいったい何羽の鳥と幾つ鳥籠を用意しなきゃいけないことになるんだ？
兄 ええつと …
兄 カール。
K ごめん、いま忙しいんだ。ええつと …
兄 きみは疲れてる。今夜はもう寝た方がいい。
K アメリカに行かなきゃいけないからな、新しいネタが必要なんだ、休んでる暇な
んかないんだ。
兄 誰かが言ってる。この世の不幸も悪徳も、すべては人間の焦りから生まれるんだ
って。（注②）
K 焦ってなんかイヤしない。自由の女神が首を長くして俺を待ってる、だからアメ
リカへ行く。それだけのとき。
兄 計画、予定、明日、未来、希望 …。この次の瞬間、心臓の鼓動がどんなリズム
を刻むのかさえ誰にも分かりやしないのに …
K いずれにしたって、俺たちはまるで夢のように暗闇から現れていつか暗闇に消え
ていくんだ、それだけはハッキリしてる。
兄 まるで夢のようにか。詩人みたいなことを言うんだな。
K ある時は詩人、ある時は博奕打ち。（トランプを示して）お休みはここまでだ。そ
ろそろ始めよう。
兄 懲りない男だよ、まったく。
K このまま黙って引き下がるわけにはいかないからな。
兄 いったいぼくに幾ら借りがあるのか分かってるのかい？
K だからだよ。アメリカに行く前に博奕の借りは博奕で返そうって言ってるんだ。
兄 だって、きみにはもう休んでる暇もないんだろ？

K 時には気分転換も必要だってことだよ。ほら、早くテーブルについて。

兄 僕は誰かさんみたいに毎日昼過ぎまで寝ていられるような、そんな結構なご身分とは違うんだ。

K 明日も早いのか。

兄 明日も明後日も。毎日だよ、毎朝七時まで前日の営業報告書を出さなきゃいけないんだ。午前中に仕事を済ませて、午後のはんびり過ごしたいというのが新しい支店長の方針で …

K だからって、あんたたちまで午後をのんびり過ごせるわけじゃないんだろ。

兄 もちろんさ。普通に働いてたら、一日が25時間あったってこなしきれないほどのノルマだってあるんだから。

K やめちまえ、そんな保険の外交なんてくだらない仕事。

兄 やめてどうする？

K 芸人になるのさ。芸人になって俺と一緒にアメリカに行くんだ。

兄 無理だよ。鳥の中に鳥籠を入れるなんてそんな器用なこと、僕にはとても …

K 違う。鳥の中に鳥籠を入れて、その鳥籠の中に鳥を入れるんだ。それからその鳥の中にも鳥籠を入れ、その鳥籠の中にもまた鳥がいて、その鳥の中にもまた鳥籠があり、その鳥籠の中にもまたまた鳥がおり、その鳥の中にもまたまたまた鳥籠があつて、その鳥籠の中にも …、とめろよ、いい加減！ いつまで喋らせとくつもりだ。

兄 あんたの限界を知りたかったんだ。

K 優しい顔をしてずいぶん怖いことを言う男だな。

兄 そうだよ。だから僕にはあんまり近づかない方がいいんだ。

K よく覚えておくよ。

兄 (苦笑して) だけど明日の朝になったらきつと忘れてる。
K 多分。

兄 それにしてもほんとに大きな月だな、今夜は。

K もしかしたら月の軌道が …

兄 月の軌道？

K それこそ、月の軌道が狂ったのか、それが地球に迫るとき、狂気がひとを襲うという！ (と、芝居がかつて)

兄 あ、「オセロ」の台詞だ。

K よく知ってるな。

兄 グレーテの本棚にあつたのを最近読んだばかりなんだ。

K シェイクスピアの「オセロ」には苦い思い出がある。俺は一幕の三場に出てくる水兵の役だった。台詞がふたつ。最初は舞台の外から「もしもし！ もしもし！

もしもし！」と叫ぶんだ。そこで役人が「船からの伝令でございます」というと、俺は足早に登場し、ヴェニス公が「おお、何事だ」と言うのを受けて、「トルコ艦隊はローズ島に向かって航行中、その旨、政府に報告せよと、アンジェロー提督

の命令です」と、これだけ言わなきゃいけないんだが、アタマの「トルコ艦隊」が出てこない。別にあがってたわけじゃないんだが、いつの間にか俺の頭の中から「トルコ」がきれいさっぱり消えていたんだ。

それで？

俺が何にも言わないから、ヴェニス公はもう一度同じ台詞を繰り返して、さらに何事だ、何があったんだ！ って顔を真っ赤にして怒鳴ってる。仕様がなから俺は「開いた口がふさがりませぬ」と言っ引込んでしまった。

どういう意味だ、それ。

意味なんかないよ。咄嗟に出たんだ、そんな言葉が。

あきれた男だな。開いた口がふさがらないのは相手の方だよ。

だから、相手の気持ちを察したんだよ、きっと。俺の無意識はよく働くんだ。

それでどうなったの？ その芝居。

どうなったのかな。俺は衣装を着たまま楽屋にも寄らずに逃げちまって、最後に役者稼業ともオサラバしてしまったから。

どうする？ そんなこととは露知らず、きみが帰ってくるのをみんながじつと動かずに、まるで墓石みたいに待ってたりしたら。

ほんとかな？

え？

昨日のことさえ忘れちゃう俺が、こんな十年以上も昔のことを覚えているなんて。おかしいとは思わないか？

心配いらないよ。きみの話なんかこれっぽっちも信じちゃいないから。

ハ、ハ、ハ（と笑って）。それなら安心だ。さあ、始めよう。

（テーブルに来て）グレートがうるさいんだ。終わりの時間を決めよう、十二時
ついで。

ああ、それでいい。

ほんとだよ。勝っても負けてもほんとに十二時になったら

（遮って）くどい。

まず親を決めるためにお互いカードを引き、Kが親になる。

K （時計を見て）九時か。

兄 あと三時間ある。

ポーカーである。カードを配ろうとしていたKの手がとまる。

兄 どうしたんだ。

K うん？

兄 どうしたんだよ。

K いま時計を見た時にフツと …
兄 なにか思い出したのかい？
K いや、胸騒ぎっていうのか …（と言って、カードを配りだす）
兄 胸騒ぎって言えば、墓地の礼拝堂の鐘が鳴りだして、それからどうしたんだい？
K え？
兄 さっき話してた、きみが今朝見た夢の話だよ。
K ああ。どこまで話したんだっけ？
兄 だから礼拝堂の …
K そうだ。礼拝堂の鐘が鳴って、俺はその時、なんだか妙な胸騒ぎを覚えたんだ、それから …

遠くで雷鳴が。

K なんだ、いまの音は。え？ 礼拝堂の …？
兄 雷だよ。
K 雷？
兄 月も出てこんなに明るい夜なのに、雨でも降るのかな。
K レインだ。
兄 レイン？
K 思い出した。今夜六時の汽車で来るレインを駅まで迎えに行かなきゃいけなかったんだ！（と慌てて飛び出していく）

兄 （啞然として） ……

Kの声 （ドアの向こうで）レイン！

レイン（以下愛人）が現れる。手袋をした手にポストンバッグ。

K （遅れて現れ）すまない。忘れてたわけじゃないんだ。気にはしてたんだがなかなか手が離せなくて …。そう、彼とね、ちよつと仕事からみの話があつて …
入口のところ立っている男は、この同じアパートに住んでいるブルームフェルト（以下刑事）である。

K （前に続けて）ああ、紹介しておこう。グラックス。隣の部屋に住んでるんだ。こちらはレイン。

兄 初めまして。（と、右手を差し出す）

が、愛人には、その兄の手が目に入っていない。

K ハ、ハ、ハ（と意味なく笑って）下に置いたらどうなんだ。鞆だよ、鞆。重いだろ。大丈夫だよ、誰も持つてきゃしないから。（と、鞆を受け取るべく手を伸ばす）
愛人 （低く）触らないで。

兄 金塊でも入ってるんだよ、きつと。

K そうか。うっかり置いて床が抜けたりしたら大変だからな。（と、笑う）

愛人、ドンと鞆を床に置く。

K グラックス、どうやら金塊じゃないみたいだぜ。

刑事 カールさん、まだ勤務中なんでわたしはこれで。

K ああ、どうもお手数をかけまして。

刑事 どういうつもりなんですか。

K え？

刑事 こんな時間に女性をひとりで。困りますな。困るんですよ。運よく道を尋ねられたのがわたしだったからよかったもの …

K いや、ほんとに。

刑事 わずかこのひと月足らずの間に四人ですよ。殺しが殺しを呼ぶように、まず、身寄りのないひとり住まいの老人がハンマーで殴り殺され、次に神学校教会の空き地で、八つになったばかりのいたいけな少女がナイフでめった突きにされて殺され、続いて雨上がりの昼下がり、買い物かごを手にした妊婦が古風な裁ちバサミで臨月間近の腹部を切り裂かれて殺され、更には、女や子供や年寄りだけでなく、近所では町内一の乱暴者で通っていたらしい元プロボクサーのチャペックまで、ヴィシエフラッドの森の中で後頭部を鈍器で殴打された挙句、ロープで首を絞められ殺されているんです。あなただってご存知でしょう。（注②）

K もちろんそれは …

刑事 もちろん、昼となく夜となくわたしどもも全力をあげて捜査にあたっておりますし、十分な警戒もしておるわけですが、しかし、市民の皆さんにももう少し協力していただかないと、警察の力だけではどうにもならないのです。

K すみません。

刑事 まったく、闇夜に鴉だ、やつちやおれんよ。（と吐き捨てて去ろうとするが、立ち止まり）グラックスさん、妹さんは？

兄 部屋にいますすが、多分。

刑事 ああ、それなら結構。（愛人に）奥さん、こんな街に長居は無用です。悪いことは言わない、早くご自宅にお帰りなさい。（と、去る）

愛人、立ち去る刑事に軽く頭を下げる。

K （笑って）怒られちゃった。父親でもない男にこんなに頭ごなしにやられたのは

久しぶりだよ。ブルームフェルトって言うんだ。このアパートの上の階に住んでいて……

愛人 聞いたわ。(と、遮るように)

K そう。ええつと……(と、言葉を探している)

兄 さてと、ぼくは退散した方がよさそうだから。

K すまない。じゃ、さっきの件はまた改めて明日にでも。いや、明日はもしかしたらアレだから……(と、愛人を気にして)

兄 (愛人に) 実は彼と一緒にぼくもアメリカに行くことになったんですよ。それで……

K そう、そうなんだ。急にそんなことを言い出すもんだからアレやコレやで。

兄 ぼくももう一度ひとりだけでじっくり考えてみるよ。

K ああ、それがいい。とにかくこれはあんたの将来を左右しかねない大問題だから。

兄 おやすみ。

K おやすみ。

愛人 (兄を無視して)……

兄 ふん。(と、苦笑して) 無口な奥さんか……(と、出ていく)

K 汚い部屋だろ。たまに掃除でもすればね、これでももう少しなんとかなるはずなんだけど、しないんだ、これが。

愛人 ……

K 少し寒いかな。ストーブがないんだ。ぼくはもう慣れてしまったけどきみは寒いかもしれないな、コートを脱いだら。

愛人 ……

K だから、ホテルを予約するつもりでいたんだ。

愛人 でも、しなかったんでしょ。

K ……

愛人 三日前よ、わたしが電報を打ったの。

K そう、三日前にきみからの電報を受け取って……

愛人 時間はあつたはずよ。

K だから……

愛人 どうしてわたしに来るなって電報を打ち返してくれなかったの？

K そうじゃないよ、そうじゃなくって……

愛人 あなたが待つてくれるはずの駅のホームで三十分待ったわ、三十分。それ以上は待てなかったの。あんなに長い三十分がこれまでであったかしら。

もちろん、哀しくて淋しくて腹も立ったわ。でも、それよりなによりあなたに会いたくて、一分一秒でも早くあなたに会いたくて。三度に一度は約束を忘れるあなたのことだから、これはその三度に一度なんだと自分で自分を言い聞かせる自分がまた愛おしくて。なんて愚かしい！

帰ってしまえばよかったんだわ。あの時あのまま隣のホームのウィーン行きに乗

って帰ってしまえば、こんな惨めな気持ちにならなくてすんだのに。あなたからの手紙の住所を頼りに、あなた以外に誰も知らない街に出て……。疲れたわ。わたしがどれだけ歩いたか知ってる？ 二時間半よ、二時間半。曲がりくねった道、暗い横町。どれがどっちに通じているのか聞くひとごとに答えが違うの。まるで正解のない迷路。途中で、これはあなたの意志だって分かったわ。二時間歩いてやっと分かったの、あなたが約束通り来なかったのは、わたしがここへ来るのを望んでいないからだ。でも駄目。帰れないの。わたしはいまどこにいてどこへ帰っていいのか、分からなかったの。

愛人 K 会いたかったんだ。ぼくだって一分一秒でも早くきみと会いたかったんだ。嘘。

K 嘘じゃない。でも、気持ちが悪刺に高ぶるとワレを忘れてしまうと言うか、肝心要なところをスッポリ忘れて、そう、まるでシャンパンのコルクの栓みたいに頭の内圧が上がって、ポンと記憶が抜けてしまうんだ。ぼくは最低だ。

愛人 ……

K レイン、抱いていいかい？

愛人 カール ……

K ぼくは最低だ。駄目だって言われたらもう何をしてもいいか分からない。

愛人 カール！

ふたり、抱きあう。と、折悪しく(?) ドアが開いて、Kの上着を手にしたグレーテ(以下妹)が入ってくる。

妹 アッ！ (と、凍りつく)

ふたりは慌てて離れる。

妹 ごめんなさい、兄さんがいると思って ……

K グラックスならさつき ……、帰ってないのかい？

妹 ええ、まだ ……

K どこに行ったんだろう、こんな時間に。

妹 あのう、これ。(と持っていた上着を差し出し) 袖のところのボタンもとれかかっていたので付けておきましたから。

K ありがとうございます。(と、受け取る)

愛人 こちらは？

K さつきまでここにいたグラックスの妹で

妹 初めまして。グレーテです。

愛人 K わたしはレイン。カールはいつもあなたにそんなことしていただいてるの？
いつもじゃないよ。

妹

ええ、時々。

愛人

そう。ごめんなさいね、ご迷惑ばかりかけて。

妹

いえ、わたしの方こそいつもお邪魔して、お芝居のこととかいろいろ教えていた
だいて …

K

いつもじゃなくて時々だけ。グレーテは俳優学校に通ってるんだ。

愛人

そう。(と、あくまでもにこやかに)

妹

今度、映画のプロデューサーのひとにも会わせていただくことになってるんです。
初耳だわ。あなたの知り合いにそんなひとがいたの？

愛人

昔の俳優仲間のね、ちよつとした知り合いなんだけど。

妹

わたし、ポーラ・ネグリみたいな女優になりたいんです。レインさん、ポーラ・
ネグリの「カルメン」、ご覧になりました？ 凄く綺麗で女っぽくて、でも時々ず
っこけて笑わせるんです。あと、「山猫リユシユカ」とか「寵妃ズルムン」とか

K

「ベラ・ドンナ」とか …

K

グレーテ。

妹

(夢中になって耳に入らず) そうそう、「ベラ・ドンナ」の最後！ とっても悪

K

いんです、ポーラ・ネグリは。お金だけむしり取って、男を次から次とつ替え
ちゃうんです。それで、最後には男たちみんなに愛想をつかされて、ひとりで砂

妹

漠に向かって歩いていくと、そこへ字幕が出るんです。「いざれ彼女は豹に食われ
て死ぬでしょう」。凄いでしょ、凄いつて思いませんか？ あとわたしが好きなのは、

K

タイプは違うんですけど、ルース・クリフォードとかメリー・マクラレンとか

妹

(遮るように) グレーテ、悪いけどふたりだけで話したいことがあるんだ。

愛人

あ、ごめんなさい、気がつかなくて。

妹

ううん、いいのよ。まだ若いんだもの、しょうがないわよ。

愛人

しばらくいらっしやるんですか、こちらには。

妹

多分。カールが駄目だって言えば別だけど。

愛人

大丈夫ですよ、カールさんは誰にでも優しいからそんなこと …。そうそう、こ

妹

の間も、カールさんとふたりでオリオン劇場へメリー・マクラレンの「靴」を見

K

に行っただんですけど、その時も隣の席の女のひとに …

妹

グレーテ。

愛人

ああ、レインさん、メリー・マクラレンの「靴」ってご覧になりました？

妹

ううん。

愛人

いいですよ、「靴」。

K

グレーテ、だから …

妹

(耳に入らず) ショーウィンドーに靴が飾ってあるんです。とっても可愛い靴。

妹

メリー・マクラレンは仕事の帰りにいつもその店の前に来ると立ち止まって、あ

妹

あ、こんな靴が履けたらなあって思うんだけど、彼女の家はとっても貧乏で、だ

妹

からそんな高い靴にはとても手が出ないんです。ファーストシーンがいいんです。

妹

哀しいっていうか可笑しいっていうか、外は雨が降ってて、家の中で出勤前の彼

女はなにをしてるかっていうと、新聞紙を小さく切ってそれを … (注③)

グレーテ!

妹 あ、わたしたま …

K 続きは明日にしないか。

妹 どうしよう、初対面なのにわたしったら …

K いいよ、分かったから。おやすみ。(と、部屋から押し出すように)

妹 (愛人に) ごめんさい、ほんとに。おやすみなさい。

愛人 さようなら。

妹、出ていく。

K 変わった子だろ。いつもあの調子なんだ。いや、いつもって、いつも会ってると

かそういう意味じゃないんだよ、そうじゃなくて …、しっかりしろ! ぼく

はどうしてこんなに落ち着かないんだろう。

愛人 なにか後ろめたいあるのよ。違つて?

K そうかもしれない。こうしてきみと一緒にいると自分が許しがたい犯罪者のような気がするんだ。ぼくらは森の中で不幸にも出食わってしまった狼と野兎なんだ、きつと。

愛人 カール、わたしはそんなか弱い野兎なんかじゃないわ。

K いや、だから …

愛人 それに、あなたはなにも悪いことなんかしてないわ、なにもね。

K そうじゃないんだ、野兎はぼく、ぼくの方さ。

愛人 ? ? ?

K つまり、こういうことなんだ。ある日、森の中で狼と野兎が出食わしたとする。

もちろん野兎は驚き。驚きのあまり一瞬凍りつき、そして、その凍りついた一瞬をとり返すかのように、全速力で一目散に逃げ出すだろう。狼はまるで当然のように野兎を追いかけ、追いかけたら最後、必ずそいつを捕まえて食べてしまうに違いない。なんて不幸な出会いだろう! もちろん、食べられてしまった野兎は不幸さ。でもだからって、食べてしまった狼が不幸じゃないなんていったい誰が言えよう。

いま仮に、幸せとは自由や希望とともにあることだとしたら、もしかしたらそれは、追いかける義務に殉じた狼の方ではなく、逃げる権利を行使した野兎の方にあつたのじゃないだろうか。それに、狼はいつもお腹をすかしているとは限らない。もしもその時、野兎が慌てず騒がず、鼻歌でもかましながらゆっくり脇を通り過ぎて行けば、狼はそのままやり過ぎたかもしれない。だとしたら、罪を犯したのは狼ではなく、むしろ機転のきかない野兎の方じゃないかってぼくは思うのさ。ああ、喉が渴いてしまった、これだけ喋ればね。なにか飲むかい?

愛人 お腹をすかしてない狼なんているかしら?

K え？

愛人 狼はいつだってお腹をすかしているのよ、だから狼なんでしょ、違う？ それに、わたしがここにいるのはわたしの意志よ。あなたが逃げたから、あなたに誘われて、ここへ来たわけじゃないわ。

K ぼくはいまどこにいるんだろう。もうきみに捕まってしまったているのかな、それとも …？

愛人 それをわたしに聞くの？

K 分からないんだ、ぼくはいま幸せなのか不幸せなのかが。

愛人 何故？

K 遠くにいるきみ、ここにいないきみ、いつか会えるかもしれないきみは、ぼくの生きる希望だったんだ。

愛人 わたしもよ。だから来たのよ、わたしはこうして。

K でも、ここにいるきみは、いつかここからいなくなってしまうきみなんだ。

雷鳴が響く。

愛人 卑怯だわ。

K 卑怯？ ぼくが？

愛人 どうしてここから逃げないようにわたしを捕まえようとはしないの？ どうして？

K ぼくは狼じゃない、野兎なんだ。愚図でノロマで頓珍漢な。

愛人 そうね。貧乏なのに見栄っ張りで、嘘はつく、約束は破る、不潔で無神経でだしなくって、おまけに卑怯な！

K ぼくは最低だ！

愛人 最低よ、あなたは。分かってる。でも、だからあなたのことが忘れられないの。

K レイン ……

愛人 カール！

ふたり、抱き合う。急に振りだした激しい雨の音とともに、暗くなる。

刑事の部屋。同じ夜。ベッドと机とテーブルと、それらはKの部屋のものと同じだが、中年の独身男が住んでいるとは思えないほど整然としている。

部屋の明かりは消えていて、誰もいない。むろん、雨は降り続いていて、窓越しの月は闇の中に隠れてしまっている。

刑事が帰ってくる。明かりをつける。雨に濡れたコートを脱いで、タオルでそれを丁寧に拭きながら ……

刑事

えっ？ カナリア？ カナリアって羽根のあるアレのことかい？ ダメだよ、あいつは。カナリアに限った話じゃないんだが、鳥ってやつは概ねわがままで無神経に出来てるんだ。わがままでなければいい。亀の甲より年の劫とはよく言ったもんで、多少のわがままなら大目に見る心のゆとりもいまの俺にはあるんだが、無神経なのは困る。例えば、俺が仕事から帰ってくる。疲れているんだ。服の着替えも、ベッドで横になるのさえ面倒なくらい疲れているのに、そんな事情などお構いなしに、ピーチクパーチク耳元でやられてみるよ、分かるだろ。許さないぜ、俺は。まあ、気配りのきくカナリアがいれば話は別だが、しかし、無口なカナリアはもうカナリアじゃないからな。 …… (指折り数えて) 何回数えたって同じだよ。二十五。ちょうど四半世紀違うんだ。もちろん、歳なんか問題じゃない。だけど、それはあくまでもこつちの言い分であってだ、 …… 金魚？ うーん、金魚ねえ。確かにあいつは無口だが ……

刑事はコートを拭くのを止め、自らの独り言の世界に没入する。

刑事

部屋の中に水槽があつて、これくらいの大ささかな？ その中を赤いのが数匹ゆらゆら泳いでる …… うん、悪くないよ。目の保養、心の安らぎにはなるだろうが、だけど、あいつはなかなかつかないだろ。せっかく飼うんだから、手間だつて金だつてかかるんだ、やっぱりこつちが声をかけたら愛想のひとつも返してほしいじゃないか。いるかね、そんな気のきいたのが。うん？ 揉み手をする金魚？ こんなことでもするのか。(と、金魚の揉み手の真似をする)

刑事はそんな自分を笑い、そして、その笑いに紛れてといった感じで、あくまでもさりげなく、なにを思ったのかいきなり腹這いになって床に耳を当てる。

刑事

…静かだな。まだ部屋の明かりはついてたが …… (起き上がって、窓の外に目をやり) ああ、窓辺に鉢植えなんかあれば、こんな雨の日もきつと楽しかったりするんだろうが、花は動かないからな。動かなくっちゃ困る、一緒に生活をするんだから。こうして座っているとむこうから、そう、俺がではなくむこうか

ら、黙ってここへ、俺のところに来てくれるものでなきやダメだ。

うん、猫はいい。膝の上でゴロゴロ喉をならしているのは悪くない。カナリアみたいにいるさくはないし、愛想が悪いといつても金魚ほどじゃない。それに、抱いて一緒に寝れば結構温かいつていうからな、こんな寒い夜にはなによりだ。しかし、欲を言い出したらキリはないんだが、あいつはただ食って寝て糞をするだけだからな。そこへいくと犬は仕事をするぞ。安心して留守をまかせられるのがいい。厳しく躡けてやれば買い物だって出来るつていうし、機嫌がいい時には尻尾だつて振る。俺が仕事から帰ってくる。ドアを開ける。「ただいま」つて言う前にあいつは駆け寄ってきて、足といわず手といわず首から顔から俺のことを舐めまわしてくれるんだ。(と、夢見るように笑うが) …しかし、汚いのは困るぞ。

汚れた部屋ほど我慢のならないものはないからな。きれいな好きの犬、朝起きたら必ずうがいをし、外から部屋に戻る時には必ず舌で体の汚れを落とす犬 …。躡けてやればそれくらいするかもしれないが、犬の寿命は短いからなあ。飼い始めて何年もしないうちにきつと病気になるんだ。病気の犬ほど始末におえないものはない。部屋の片隅でぼんやりとうずくまったり、よろよろしたり、鼻を鳴らす、咳をする、痛みのあまり身悶えなんかされた日には …。やつと病気が治ったと思つた頃にはもう老いぼれてるんだ。老いはまず目にやってくる。哀しいわけでもないのに老犬の目はいつも涙で潤んでるんだ。そんな目でこつちをじつと見上げられてみるよ。おまけにだ、もう決して若くはない俺の姿がその涙に濡れた瞳に映つていたりしたら …(注④)

と、突然、遠くで銃声が！

刑事　　なんだ、いまの音は ……

急速に暗くなる。

刑事の部屋。翌々日の昼下がり。

慌てて身づくろいをしている刑事。パジャマなどをそこいらに隠し、ドアを開けると、愛人が立っている。

刑事 お待たせしました。

愛人 すみません、おやすみのところを。

刑事 いや、そろそろ太陽が西の空の方に傾こうかってこんな時間まで、ベッドでグズグズしていたこつちがいけないんで。どうぞ。

愛人 (部屋に入り) 昨日も何度かお訪ねしたんですけれど ……

愛人は手に包みを持っている。

刑事 ああ、それはどうも。一昨日の夜の、例の殺しの捜査でずっと帰れなかったんで

す。いや、帰ろうと思えば帰ることは出来たんですが、なにせ現場がこことは目と鼻の先でしょ、肩身が狭いというかなんというか。おまけに、わたしの下には二人ばかり若い刑事がいるんですが、どうにも使いモノにならなくて。それなのに学校は出てるらしいんですがね、口のききかたひとつ知らないときてるから、彼らの上司としては捜査のイロハを教える前に、そこから手取り足取りしなくちゃいけないわけですよ。分かるでしょ。(と、愛人に舐めるような視線を送り) しかし、親の心子知らずっていうのか、そういうわたしの接し方が気に入らないらしいんですな。どうもそうとしか思えない。わたしが走れと言えば歩き出し、止まれと言えば走り出す。いったん走り出したら、ぶつかって鼻血が出るまでそこに塀があることに気がつかないような、モノの道理も分からないひよつこがですよ、このわたしに盾を突くんです。いや、若い奴らの中にも優秀なのはいるんです。足を棒にし身を粉にすることさえいとわない、健気に働く若者も。しかし、何故かその手の優れモノはわたしのところに回ってこない。まったく、あのバカタレどもが。縦のものを横にもしない横着者のくせに、口だけは達者ときてるから始末が悪い。昨日も一緒に昼飯を食ったら、わたしの奢りですよ、わたしの捜査の方法はナンノカノと難癖をつけやがって ……。なんて言ったと思います？ この一ヶ月の間に起きた一連の殺しは、ひとつの犯罪ひとりの犯行だと考えるべきじゃないかってぬかしやがるんです。バカな。犯行に使った凶器ひとつ考えたって、ハンマーにナイフに裁ちばさみにロープに今度はピストルと、全然違うんですよ。それをやつ等は ……。ア、こんな話、退屈じゃありませんか。いえ。

刑事 ずっとここらへん(胸)に溜まってたもんだからつい ……。ええっと、とりあえずそこに座っていただいて、お茶でもいれましょう。

愛人 あ、わたしはすぐにおいとましますから。
刑事 お急ぎなんですか？

愛人 部屋でカールが待ってるんです。

刑事 すみませんな、そうとは知らず長々と。

愛人 いえ、別に一分一秒を争ってるわけでもありませんからお気になさらなくても。

刑事 確か、まだご用件をお伺いしてなかったと思うんですが。

愛人 (苦笑して) これをお渡ししようと思って。(と、包みを差し出す)

刑事 为什么呢？

愛人 このあいだ送っていただいたお礼です。

刑事 いやあ、それはかえって …、あれも仕事の内なんですが、いや、申し訳ないで

すな。(と、受け取って) 開けていいですか？

愛人 ええ。

包みを開けると、中からマフラーが出てくる。

刑事 ああ、マフラーですか。

愛人 この間、コートの襟を立てて寒そうにしていらっしやったから。

刑事 襟を立てるだけでなんとか間に合う首なんですよ。(と、笑いながら早速マフラー

首に巻き) どうですか？

愛人 お似合いですわ、とても。

刑事 うちの署のバカタレどもに早速これを見せてやりますよ。若い女性からのプレゼ

ントだって言ったら、あいつらいったいなんで言うか。

嘘はいけませんわ。

嘘？

愛人 だって、わたしはもうそんなに若くは …

刑事 なにおっしゃるんですか。まだまだお若いですよ、奥さんは。お若いからこそ

こんな無茶も出来るわけ …

愛人 こんな無茶？ なにをしたのかしら、わたしが。

刑事 とぼけたってダメですよ。あなたがそれなりの地位も名誉もある立派なご主人の奥

さんであることくらい、一目見れば分かりますよ。それに、この小汚いアパー

トに住む得体のしれない芸人とどうい関係なのかもね。となれば、このふたつ

を足したって引いたって、無茶という以外の答えはありえないわけで …

愛人 いろんなことがお分かりになるのね。

刑事 まあ、刑事なんて仕事を四半世紀もやっておりますとね。

愛人 結婚なさればもつといるんなことがお分かりになりますわ、きつと。

刑事 (笑って) 痛いところを突かれますな。まあ、この歳になるまでご縁がなかった

んでしようが …。特別に理想が高いつてわけでもないんですよ、女は腰が重く

なくって尻が軽くなければそれだけで十分なんです。

愛人 この辺で帰った方がよさそうですね、わたしは。

刑事 アッ、わたしなにか失礼なことでも …？

愛人 いいえ、そろそろ帰らないとカールが。今日はカールのステージがあるんです。

刑事 ほう。それはお楽しみで。

愛人 お邪魔しました。(と、出ていく)

刑事 (見送って) …バカな女だ。男のところに飛んでいきやがった。

首からマフラーを外し、鼻のところに持って行き、匂いを嗅ぐ。

暗くなる。軽快にして華やかな音楽が流れる。

4

カールのステージ。流れる音楽をバックに、次々とユーモラスな手品を繰り出す。

使う小道具は、鳥籠、ハサミ、ナイフ、ロープ、ハンマー等。そして最後は、ピストルを使った手品で締める。

5

同じ日の夕方。兄妹の部屋。ここもKや刑事の部屋と同様だが、机の上には拳大の石が五つ、まるで小さな墓石のように整然と並べられていて、その墓前(?)には花が飾られている。

椅子に座っているのは、愛人の夫・ヨーゼフ(以下良人)。足元に旅行鞆。テーブルの上に置かれたマフラーは、愛人が刑事に贈ったものと似ている。

妹の声(奥から) 包帯はないんですけど。

良人 ああ、いやいや、ほんのかすり傷ですから。ちょっと消毒でもしておけば …

妹が救急箱を抱えて現れる。

良人 すみませんな、いきなりお邪魔してこんなこと。ああ、自分でやります、動かな

くなつたわけじゃありませんからな。(と、指を動かしてみせ) ハ、ハ、ハ。

(掌を消毒しながら) いい歳をしてザマはないですな。別に急いでたわけじゃないんですよ、ホラ、このアパートの入口のところ、10センチばかり高くなつて

るでしょ、それに気づかなくつてももの見事にすってんころりんですよ、ハ、ハ、ハ、

ハ。(と笑ってすぐに) ウッ!
しみるんですか?

良人 ええ、少し。生きてる証拠ですよ。子供の頃にはこれくらいで悲鳴をあげたものですが、ウー、我慢我慢と。

妹 よくやるんです、ここに初めて来たひとはみんな。わたしなんか未だにうつかりしてるとやっちゃんなんですけど。

良人 人生七転び八起きってヤツですな。ハ、ハ、ハ。

妹 だから、この傷もやっつと治ったと思った同じところを、また一昨日の朝にやっつしまつて … (と、手を見せる)

良人 小さな手ですな。

妹 そうですか?

良人 ホラ、わたしの手と全然違うでしょ、大きさが。

妹 それは体のもの大きさが違うから …

良人 もちろん、それはそうですよ。でも、それを勘定に入れてもですよ、全然違うでしょ、全然。よく見比べて御覧なさい。大きさだけじゃないですよ、色、艶、柔らかさ、この厚み。どうです、われながら惚れ惚れしますな。

妹 ええ、まあ …… (我と彼の違いにシュンとなる)

良人 運を掴むという気概に溢れてるといいますか、手はこうでなくっちゃいけません。よく、目は口ほどにものを言いなんて言いますが、目はものなんか言いません。ものを言うのは手ですよ、手。いや、むしろ手は口以上にもものを言うと考えるべきでしょう。

ひとの口から出るものの大半は出まかせですが、手は決して嘘をつきません。商売柄、わたしは毎日幾人ものひととお会いするんですがね、その殆どは融資の相談です。皆さん、なんとかうちの銀行からお金を借り出そうとそりやもう必死で、あることないことお話になるんです。最初の頃はそんな口車に乗せられてわたしもずいぶん痛い目にありました、この、手は嘘をつかないってことに気がついてからはもう、握手をするだけで相手の現在はもちろん、来し方行く末までぜくんぶ、それこそ手に取るように分かってしまうんですからな。話なんか聞く必要はないんですから、仕事ははかどる、間違いもないってわけで、まあ、この若さでいまの地位を得られたのも、アレもコレもみんなこの手のお陰ってわけですよ。

妹 握手して下さい。

良人 えっ?

妹 握手をするだけで相手の現在も過去も未来もお分かりになるんですよ。いえ、過去と現在はいいです、わたし自分で分かっているから。未来が知りたいんです。わたしはいつかポーラ・ネグリみたいになれるのかどうか、それを教えてほしいんです。

良人 ポーラ・ネグリ?

妹 映画女優です、世界で一番の。わたし、ポーラ・ネグリみたいになりたくて一ヶ月前に田舎から出て来たんです。どうなんですか、こんなに手が小さいのはダメなんですか。

良人 (笑って) 困ったな。そんな占い師みたいなことはわたしはどうも …、それに妹、いきなり良人の手を握る。

良人 イテ、テ、テ。何をするんですか! (と、慌てて彼女の手を振りほどく)

妹 あ、そう言えば …

良人 怪我してるんですよ、わたしはケガを。だから困るって言ったんですよ。

妹 ごめんなさい、わたし、つい …

良人 確かグレーテさんとおっしゃいましたね。

妹 ええ。

良人 グレーテさん。わたしは部下たちにもよく言って聞かせるんですが、ひとの上に立ちたいとか、あなたのように、いつかひとに仰ぎ見られるような存在になりたいと思われるのであれば、ついとか、うっかりとか、ふと魔がさしてとか、そういうふざけた言葉はご自分の辞書から即刻、叩き出されることですな。(と、居丈高に)

妹 (意気消沈して) ……

ドアをノックする音。

良人 はい。(と、我がもの顔で)

ドアの向こうから

刑事の声 上の階のブルームフェルトですが。

良人 どうぞ。

妹、ドアを開ける。

刑事 ご来客中ですか。

妹 ええ、ちよっと。

良人 ああ、わたしだったら構いませんよ。

妹 二日前からお隣のカールさんのところに來てるレインさんの …

刑事 ああ …(と、おおよその察しがついて)

妹 さつきいらっしゃったんですけど、おふたりともお留守で

刑事 それでここでお待ちになると。よかった。

妹 え？

良人 家内をご存知なんですか。

刑事 ええ。道に迷ってらっしゃったんでわたしがお連れしたんです。

良人 それはそれは。初めまして。ヨーゼフと申します。(と、手を差し出す)

刑事、それに応えて握手する。

良人 イテッ！ (と、慌てて手を離す)

刑事 えっ、わたしそんなに強くは …

良人 いや、ちよっと、ケガしてるのを忘れてつい … (妹の視線に気づき) あ、いや、そのあの、ハ、ハ、ハ (と、笑ってごまかす)

刑事の手には箱が。

刑事 もしかしたらそれ、このアパートの入口で？

良人 ええ、一段高くなってるもんだから

妹 すってんころりん。別に急いでいらしたわけでもなくて、でも、つい、うっかり、魔がさして。

良人 ハ、ハ、ハ。(と、無理に笑う)

刑事 なんとかしろって管理人に言ってるんですがね。よくやるんですよ、初めてここに来たひとは。

良人 (腕時計を見て) 五時半か。なにをしてるんだ、ひとがせっかく迎えに来てやったのに、あいつはまったく。

刑事 今日はどちらにお泊りで？

良人 泊る？ 冗談じゃない、二日も仕事を休むわけにはいきませんよ。遅くとも九時半のウィーン行きに乗れば明日の朝の出勤時間には間に合いますからな。それに、駅からここまで、とにかく坂道が多いのは閉口しましたが、とりわけ、坂道を下りる時には、なんだか泥沼の中へ自分のからだからだが沈んでいくような、嫌な気分襲われて、住んでおられるあなた方には失礼ですが、この街は淀んでおります、とてもじゃないが長居は出来ません、多分、わたしの家内もね。ちよっと荷物を置いていきますよ。

妹 お出かけになるんですか？

良人 ええ、タバコを切らしたんで。近くにありましたかな。

刑事 タバコ屋ならここを出て、坂道を上って最初の信号を右に曲がってすぐのところ …

良人 どうも。(と、行きかけて立ち止まり) いや、やっぱり不用心だから … (と、鞆を取りに戻る)

妹 あ、同じ！

良人 えっ？
妹 おふたりのマフラー。
刑事 ほんとか。
良人 (刑事のマフラーを触って) ハ、ハ、ハ。手触りが全然違います。(と、出ていく)
妹 なんてひとだろう。レインさんが逃げ出したくなったのも無理ないわ。
刑事 なあに、どっちもどっち。最悪の似た者夫婦ですよ。(と、苛立たし気に首からマフラーを外す)
妹 タご飯の支度をしなきゃいけないのに、もう！
刑事 アッ、ご迷惑でしたか、こんな時間に。すぐに帰りますから。
妹 いえ、ブルームフェルトさんじゃなくて ……
刑事 その、つまり、これをその、グレーテさんに(と、箱を示して) ……
妹 なんですか？
刑事 靴です。
妹 靴？
刑事 ええ、(と、箱を開けて中から靴を取り出し) これなんです ……
妹 まあ、可愛い。
刑事 そうですか、そう言っていたら ……(と、テーブルに置いて)
妹 誰かにプレゼントなさるんですね。
刑事 え、ええ、そうです。その、つまり ……
妹 警察の方？
刑事 いや、うちの暑にはそんな ……
妹 じゃ、姪ごさんか誰かに ……
刑事 ええ、まあ、田舎にはそんなような者がいるにはいるんですが ……
妹 そうか、分かった。その姪ごさんの家はすごく貧しくて ……
刑事 いやまあ、どっちかと言えばアレなんです、そうじゃなくて ……
妹 彼女が仕事に行く途中に靴屋さんがあるんです。
刑事 え？
妹 そのこのショーウィンドーには可愛い靴が飾ってあって、姪ごさんはその前を通るたびに、あんな靴が履けたらなあと思うんだけど、お金がないからとても手が出ないんです。だって、彼女が履いてる靴といたら、爪先のところには大きな穴があいていて、だから、雨の日には水が入らないように小さく折った新聞紙をその穴に詰めて、そうして出かねきゃいけないんです。彼女の勤務先にはいやらしい上司がいるんです。その上司は可愛い彼女をなんとかモノにしようといつも狙ってて ……

Kが現れる。

K レイン、来てないかな。

妹 え？ あ、レインさんは …

K 来てないのか。ステージが終わったあと一緒に食事しようって約束してたから今までずっと楽屋で待ってたんだけど、来ないんだ。部屋にもいないし、どこへ行ったんだ、あいつは。

刑事 きつとまた迷子になってるんですよ。

K 多分。参ったな、部屋へ入ろうにも鍵はレインが持ってるし …

妹 だったら管理人さんのところへ行って合鍵を貸して貰えば

刑事 払うべきものを払ってないから顔を出せないですよ。

K よくご存じで。

刑事 それくらいは。

K さすが刑事さん。でもご心配なく。もうじき、ここを出る時にはちゃんとまとめて払っていきますから。

妹 お引越しますんですか。

K アメリカに行くんだ。

妹 アメリカへ？

K むこうには何人か友だちもいるしね、昔の俳優仲間が。

妹 俳優さん？！

K ああ、ハリウッドで頑張ってるのもいるよ。

妹 じゃ、ポーラ・ネグリと …

K (テーブルの上の靴を手にして) 可愛い靴だね。買ったのかい？

妹 いえ、これはわたしのじゃなくて。ブルームフェルトさんが姪ごさんに贈ってあげるんですって。

刑事 そう、ちょうど年恰好がグレーテさんと同じくらいだからそれで。ちよつと履いてみますか。

妹 わたしがですか？

刑事 サイズが合うかどうか。

妹 だって、わたしがいくら合ってたって …

刑事 いや、ちよつと背格好もグレーテさんと同じくらいなんですよ、だから …

妹 いいんですか？

刑事 お願いします。

妹、靴を履く。

K、机の上に置かれた石を手にとって見ている。

刑事 どうです？

妹 ええ、ちよつと …

刑事 合いませんか、サイズが。

妹 わたしにはちよつときついんですけど、でも、はいてるうちには多分 …

刑事 そうですよ。靴に限らずなににごとも、最初はちよつときついかなと思つても、過ぎ行く時間とともにうまい具合に納まるようになるんです。

妹 ちよつと歩いてみていいですか？

刑事 え、ええ。

妹 いいですよね、少しだけなら。

刑事 ちよつとと言わずいつまでだって。

K またひとつコレクションが増えたんだ。

妹 ええ、一昨日の夜にまたひとつ。

K なんでこれが月の石なんだろう？

妹 あ、そう言えば、カールさん、大変大変。

K なんだよ。

妹 レインさんのご主人が来てるんです。

K レインの亭主が？！

妹 いまちよつとタバコを買いに行ってるんですけど、さっきまでこの部屋に。

K マズイ。

妹 なんだかとても厭なオヤジで、わたしのことバカにするんです。

刑事 なんですか、それは。

妹 わたしの手を見て、こんなに小さくはなにをやってもダメだみたいな言い方をしてもう！

刑事 あの野郎 …！

K グレーテ、もしもレインが来たら、ぼくは劇場の楽屋で待ってるからって伝言してくれるかな。

妹 でもあの厭なヤツと鉢合わせしちやったらレインさん …

K その時はその時さ。この世の中、なにが起きたって不思議じゃないんだ。(と、出ていく)

刑事 君子危うきに近寄らずってやつか。

妹 どうなるのかしら、レインさん。

刑事 まあ、落ち着くところに落ち着くんでしょうが、どっちに転んだってああいうふしだらな女は結局地獄に落ちるんですよ。

妹 そうでしょうか。

刑事 そうでなきやこの世が地獄ですよ。

妹 でもうらやましいわ。

刑事 なにがです？

妹 だって、ふたりの男のひとに愛されて。

刑事 愛？ 愛なんてあるもんか。グレーテさん、あいつらがやっているのはただのお楽しみですよ、虫唾が走る！ みんな豹に食われて死んでしまえばいいんだ。

妹 あ、「ベラ・ドンナ」！

刑事 そう、ポーラ・ネグリのベラ・ドンナみたいだね。

妹 ご覧になったんですか、「ベラ・ドンナ」。

刑事 ええ、あなたと一緒に。

妹 わたしと一緒に？

刑事 オリエント劇場に入って行かれるあなたを見かけて、それでわたしも …

妹 嫌だわ。だったら声をかけて下さればよかったのに。(と、靴を脱ぐ)

刑事 脱がないで。

妹 いや、だって …

刑事 「靴」も見ました、あなたと一緒に。いや、映画など、メリー・マクラレンなど見てはおりません。グレーテさん、わたしはあなたを、暗闇の中で目を凝らし、わたしはずっとあなたを見ていたんです。

妹 どうしてそんな …

刑事 愛です。これが愛というものなんですよ、グレーテさん。

「ただいま」と、兄が入ってくる。

妹 兄さん。

刑事 ああ、お帰りなさい。

妹 どうも。

刑事 ちよつとその、この間の例の殺人事件のアレで、ここいらずっと聞き込みをして回っているんですよ。(と、胸ポケットから手帳を取り出し) グラックスさん、あの日の夜はどちらに？

兄 ええつと、なにをしたのかな？

刑事 確か、九時ごろにはお隣で …

兄 ええ、カールとトランプを … (と、言って咳をする)

刑事 銃声は？

兄 銃声？

刑事 十一時を少し回っておりましたか、この部屋からも聞こえたはずなんです。

妹 もう寝てたんです、兄さんは。わたしもそろそろ寝ようかなと思って隣の部屋に行った途端にバーンって音がして、それでわたしびっくりして怖くなって兄さんを起こそうとしたんですけど、兄さんは眠いからってそれでそのまま …

兄、再び咳を。

刑事 風邪をひかれたんですか。

兄 ええ、ちよつと。

刑事 分かりました。じゃ、グレーテさん、またお邪魔するかもしれませんがその時は …

妹 (俯いて) ……

刑事 お大事に。(と、出ていく)

兄、ベッドで横になる。

妹 どうしたの、こんなに早く。

兄 ちよつと熱があるみたいなんだ。だから

妹 だから休んだ方がいいって言ったのに。

兄 だから風邪くらいじゃ休めないって、なんべん同じことを言わせるんだ！

妹 また怒った。

兄 怒ってないよ。

妹 だって大きな声を出したでしょ、いま。

兄 これくらい元気なんだってところを見せてやったんだ、心配はいらないってね。

妹 なにがそんなに気に入らないの？

兄 ちよつと疲れてるだけだよ。

妹 わたしと一緒に住むのがそんなに嫌なの？

兄 誰もそんなこと言っていないじゃないか。

妹 態度で分かるわ、それくらい。わたしと一緒にいるのが嫌だから、だから毎日毎

日朝から夜まで働いて、たまに早く帰って来たと思ったらすぐにお隣に遊びに行

って。

兄 ……

妹 田舎にいた頃の兄さんはもつとずっと優しくかったのに。

兄 お互いさまだよ。

妹 変わってない、わたしは。

兄 自分じゃ気がつかないだけさ。

妹 どこが？ わたしのどこが変わったの？

兄 全部だ、全部。

妹 全部？ じゃ、わたしは誰なの？ 兄さんのなんなの？

兄 もういいよ。

妹 どうして？ どうしてもういいの？

兄 ……

妹 どうして？ ねえ、どうしてもういいの？ どうして？

兄 いい加減にしろ！

妹 また怒った。

兄 (ため息をつき) ……どうしたんだ、その靴。

妹 知らない。

兄 知らない？ お前の靴だろ。

妹 ……

兄 どっかから歩いて来たのか？ 靴がひとりで。

妹 ブルームフェルトさんが置いてったのよ。
兄 どうして？

妹 だから知らないって言うてるでしょ。(と、出かける支度)
兄 どこへ行くんだ。

妹 わたしなんていない方がいいんですよ。

兄 待てよ。(と、捕まえる)

妹 離して。

兄 なにを隠してるんだ。

妹 隠しているのは兄さんの方でしょ。一昨日の夜、いったいどこへ行ってたの？

兄 だから、月の石を探してたって。

妹 あんなに雨が降っていたのに？ 風邪まで引いて十一時過ぎまで？

兄 ……

妹 嘘ばかり。もういいわ、こっちこそもういい、豹に食われて死んでやるから。

(と、出ていく)

兄 ……

愛人の声 (ドアの向こうで) あ、ごめんなさい。(妹とぶつかったのだ)

愛人が現れる。

愛人 すみません、こちらにカールは？

兄 いや ……

愛人 どうしたんだろう。ステージが終わったら劇場の前のレストランで食事をしよう
って約束してたんです、それで今までそこでずっと待ってたんだけど ……

兄 どっかかにしていただけませんか。

愛人 え？

兄 部屋に入るんなら入る、入らないんなら入らない、早くそのドアを閉めていただ
きたいんですよ、少々風邪気味なんで。

愛人 ごめんなさい、気がつかなくて。管理人さんにお願ひすれば部屋は開けてもら
えるわね。

兄 ここでお待ちになったらどうです？

愛人 ええ、でも ……

兄 この管理人はうるさいですよ。あなたがカールの部屋で寝起きしていること
を知ったら契約違反だっつきっと黙っちゃいられないでしょう。もちろん、今日明日
のうちにウィーンのご自宅にお帰りになるのであれば、なんの問題もないわけ
ですが。どうなさいます？

愛人 待たせていただくわ、お邪魔でなければ。

兄 すみません、ドアを。

愛人、ドアを閉める。

兄 (笑って) 負けず嫌いなんだな。命知らずって言うか …

愛人 カールに迷惑をかけたくないだけですわ。

兄 さすがに「水掻きの女」だ。

愛人 水掻きの女？

兄 あなたの指の間には水掻きがついてるんですよ。(注⑤)

愛人 カールに聞いたのね。

兄 ええ。だから凄いなって。

愛人 なにが凄いのかしら。

兄 さあ。

愛人 カールはオーバーだから。普通のひとなら見過ごしてしまううちよつとしたことにも、わけもなく感動したりびっくりしたり。水掻きって言ったってほんの少し、ひとより余計に指の間の皮膚が広がってるだけなのよ。

兄 やっぱり本当だったんだ。

愛人 あなたの話もいろいろ聞いたわ。

兄 いろいろ？ なんだらう、いろいろって。

愛人 ウィーンの大学にいらつしやったんですって？

兄 ええ、石棺の研究なんかしてたんですがね。(注⑥)

愛人 セツカン？

兄 石造りの棺(ひつぎ)です。

愛人、笑う。

兄 なにかおかしいことでも？

愛人 だってカールったら、あなたは大学で石蝕の研究をしてたって。

兄 セツケン？

愛人 だから洗濯がとてもお上手で凄いなって。

兄 バカな。処置なしだ、カールの頭は。(と、笑って)

愛人 (机の上の石を指して) じゃ、これはその研究の？

兄 いや、それは単なるお墓ですよ、わたしの懐かしい友人たちの。

愛人 お墓？ 手に取っていいかしら。

兄 お墓ですからね。見も知らぬ他人に無暗に触れてほしくはないんですが、ひとつ、

わたしのお願いを聞いていただければ …

愛人 お願い？ なにかしら。

兄 あなたの指の間にある水掻きを見せていただけませんか。

愛人 (微笑んで) じゃ、あきらめますわ。

兄 どうしてダメなのかな。

愛人 だって秘密ですもの、これは。
兄 だから見たいんですよ。
愛人 亭主とは別の男のところに来てるからって娼婦とは違うのよ、わたしは。
兄 分かってますよ、あなたは無口な奥様。
愛人 からかっているのね。
兄 とんでもない。
愛人 じゃ、風邪のせいね。きつと熱があるからそんなこと ……
兄 ぼくの秘密をあなたに、あなただけにお教えしてもダメでしょうか。
愛人 あなたの秘密？
兄 ええ。カールも知らない、誰も知らない ……。フフフ（と、笑って、みんなぼくのことなんかなにも知らないんだ。ぼくはただのうだつの上からないセールスマンだと思ってる。だから平気でぼくのことを馬鹿にしたり無視したり出来るんだ、あなたみたいにね。でも、ぼくの秘密を知ってしまったらもう ……

ドアが開いて、Kが現れる。

K レイン！
愛人 カール！
K よかった、間に合って。
愛人 間に合った？ 待ち合わせ場所はここ？ 違うでしょ。
K いや、きみはもういないんじゃないかと思って。
愛人 わたしがいったい何処へ行くの？
K 旦那と会ったんだろ。
愛人 なんのこと？
K ええっ？
愛人 ヨーゼフが来てるの？
K 会ってないのか、まだ。
愛人 ヨーゼフがどうして？
K まだ会ってないということは ……
愛人 パリに旅行に行くって出てきたのよ。どうしてわたしがこの街にいるって分かったの？
K どうしよう！
兄 さあ、困った。やっぱ悪いことは出来ないな。（と、靴を箱に入れながら）
K なんだ、いたのか、グラックス。
兄 いるよ。さつきからずっといたじゃないか。
K 見えなかった！
兄 よせよ、幽霊じゃないんだぜ、ぼくは。
K そうか。ぼくらはこの街にいないことにすればいいんだ。

愛人 逃げたり隠れたりするのは嫌よ。

K どうして？

愛人 いい機会でしょ、ヨーゼフと話し合う。怖いのか？

K だってなにも無理に事を荒立てることはないじゃないか。

兄、ゴホンゴホンと咳をする。

愛人 どうして？ あなたはこのままでいいの？ 逃げたり隠れたり嘘をついたりしながらわたし達はこれから逢うの？ こんなことをこれからもずっと続けるの？

続けられると思うの？ あなたは。

K ぼくは不安なんだ。鳥が空を、空が星を、星が月を、月が海を、海が海底の小さな石ころをいとおしむように、ぼくはきみを愛してる、嘘じゃないんだ。でも時々、

そう、いつもじゃないんだ、時々だけど、それはなんだか遠い昔の過ぎ去った思

い出のような気がして … (注⑦)

愛人 遠い昔？ わたしたちが初めて会ったのはいつ？

K 確か、去年の …

愛人 そうよ、去年の夏よ、まだ会って半年よ。それがもう遠い昔なの？

K ぼくは病気なんだろうか？

兄 (咳をして) お取込み中のところを申し訳ないんですが、ぼくは風邪をひいてるんです。その続きはご自分たちの部屋でやってくださいませんか。

K ごめん、部屋の鍵がなかったもんだから、つい …

愛人 どうしたの？

K え？

愛人 部屋の鍵、落としたの？

K なにを言ってるんだ。ぼくはよくモノを失くすからって、預かるって言うから、きみに預けたじゃないか。

愛人 なにを言ってるの、それは昨日の話でしょ。今朝、部屋を出る時、あなたがドアを閉めて、鍵はそのまま自分のポケットに入れたでしょ。

K !! (慌ててポケットをあちこち探って、恐る恐る鍵を取り出し) … 病気だ。やっぱりぼくは病気なんだ!

刑事の部屋。良人が椅子に座っている。足元に鞆。テーブルの上にはマフラーが。それは前景の冒頭とほとんど同じ光景である。

良人 (奥に向かって) 包帯はいいですよ、ほんのかすり傷ですからな。 …とは言ってもさっきのいまだから ……(と、己が手をじっと見詰める)

奥から、救急箱を持って刑事が現れる。

良人 すみませんな、いきなりお邪魔してこんな …

刑事、テーブルの上のマフラーを邪魔だと言わんばかりにベッドに放り投げ、救急箱を良人の目の前にドンと置く。

良人 ああ、自分でやります。動かなくなっただけじゃありませんからな。(と、指を動かそうとして) アレッ、動かない！

刑事

良人 冗談ですよ、ハ、ハ、ハ。(と、笑う)

刑事 (無然として) ……

良人 (掌を消毒しながら) まったく、悪いことなんかした覚えもないのに、どうなってるんでしょうな。別に急いでたわけじゃないんですよ、用心心って今度は足元も確かめたんですが ……なにかいるんじゃないやありませんか、あの入口あたりには。

刑事 飲んできたんでしょ。アルコールのせいですよ、きつと。

良人 いやいや。飲んだたってあなた、ビールでほんのちよつと喉を湿らせた程度でそんな ……

刑事 じゃあどうしてわたしの部屋にいるんですか。ここは四階ですよ、あなたが行かないやいけないのは三階に住んでる芸人の部屋でしょ。

良人 だから、三階の四号室を四階の三号室に間違えたって。

刑事 それが酔ってる証拠だって言ってるんですよ。

良人 今日はわたしの誕生日なんです、三十六回目だね、それでつい ……いや、もちろん、あとで家内と盛大にやるつもりなんです、まあ、その前祝いといひますか ……

刑事 分かりますよ、飲まずにはいられなかったんでしょ。もちろん、その本当のところは分かりませんが。

良人 ウツ！ 沁みますなあ。我慢我慢と。

刑事 その傷口の消毒がすんだらすぐにお引き取り願えますか。

良人 ええ、それはもちろん。

刑事 夕食がまだなんですよ。

良人 失礼ですが、ご結婚は？

刑事 見れば分かるでしょ。

良人 いやいや、それはそれは。ひとり住まいか。いろいろ大変でしょう。

刑事 さあ。自分じゃ、身持ちの悪い女を女房にして苦勞するよりはよっぽどましだと思います。

良人 ハ、ハ、ハ。長い人生、そりや山もあれば谷もありますよ。わたしは、自分で言うのもなんですが、決して器の大きい人間ではありません。でも、家内のことになるとこれが、不思議に寛容になれるんです。いや、寛容といっては少々語弊があるかもしれませんが。わたしの家内はレインというんですがね。その名前とは裏腹に、こうと決めたら必ずやり抜く、激しい炎のような女です。でも、大火事のもとになるからって、火のない生活なんてありうるでしょうか。これからもきつといういろいろあるでしょう。でも、わたしは信じているんです、わたしたちは必ずうまくいくはずだってね。だって、わたしにはこの手があるんですから。今度のことだって、それこそ雨降って地固まるってヤツですよ。わたしにこの手がある限り…、(と自らを励まし) ご覧なさい、運を掴むという気概に溢れていると言いますか、大きさ、色、艶、柔らかさ、どうです、この厚み。われながら惚れ惚れしますな。

刑事、そっと自分の手と良人の手を見比べている。

良人 よく、目は口ほどにものを言い、なんて言いますが…

ドアをノックする音。

良人 はい。(と、またもや我が物顔で)

兄の声 グラックスですが。

良人 どうぞ。

兄、現れる。手に例の靴の箱。

兄 ご来客中でしたか。

刑事 いや、いまお帰りになるところですから。

良人 そうですよ。なにをしているんだ、わたしは。こんなところで下らん話の相槌を打ってる暇なんかないのに。失礼。(と、靴を持って出ていく)

刑事 なんて野郎だ。下らん話をしたのはあいつで相槌を打ったのはこっちじゃないか。

兄

どなたです？

刑事

カールのところに来ている女の旦那ですよ。

兄

ああ、あれが ……

良人

(現れて) 失礼。マフラーを忘れてしまつて …… (と、ベッドの上のマフラーを手にする)

刑事、それを奪う。

良人

なにをするんですか。

刑事

わたしのですよ、これは。

良人

フン、なにを言ってるんだか。

刑事

触れば分かるでしょ、触れば。ホラ、全然違うはずですよ、あなたのものとは手触りが。

良人

(触つて) じゃ、わたしのはいったい ……

刑事

知りませんよ。

良人

おかしいな。

刑事

ビアホールにでも忘れて来たんですよ、きつと。

良人

そんなことはありません。あそこを出る時は確かにこれを首に巻いて ……

刑事

じゃ、そのあとどこかに寄つて ……

良人

どこに寄るんですか、わたしが。

刑事

知らねえよ。

良人

だってわたしはビアホールを出て真つすぐここに来たんですから、これを首にこうして …… (と、マフラーを首に巻く)

刑事

(それを奪い取り) 巻いてないんだよ、巻けるはずないじゃないか。だって、あんたがここへ来た時にはもうこれはこのテーブルの上にあつたんだから。あつただろ。だって俺がここへこうして置いたんだから。ホラ、匂いをかいでみる、あなたの汗の匂いとは違うだろう。

良人

幸か不幸か昨日から少々風邪気味でしてね、だから外に出る時はこれをこうして ……

刑事

(と、再びマフラーを奪つて首に巻こうとするが)

良人

(奪い返し) これじゃないんだよ、あんたのは。

まったく、なんてひどだろう。いや、分かつてはいたんですがね。下の部屋であなたと握手をした時、ほんの一瞬触れただけなのに、なんだか厭な予感がしたんですよ。だから、あまりお近づきにならないでおこうと思つてたんですが ……

刑事

どっちが近づいて来たんだ、どっちが。てめえが勝手に間違えてひとの部屋に入り込んで来たんだろ！

兄

まあまあ、ひとつここはお互い冷静になつて …… (と、ふたりを止める)

良人

分かりました。たかがマフラーひとつに大の大人が目くじら立てるのもアレですが、わたしは生まれつき曲がつたことは嫌いなんです。出るとこ出ましよう、出

るところへ。

刑事 出るところ？ どこへ出るんだ。

良人 決まってるじゃありませんか。警察ですよ。

刑事 じゃ、とつくに出てるよ。

良人 (笑って) なにを言ってるんだ、このひとは。

刑事。

良人 (ポカンとして) こちらが ……？

刑事 早く酔いを醒ましていっただいどこへ忘れて来たのか思い出されることですな。それで探して、もしも見つからなかったらこれを差し上げますよ、あなたの三十六回目の誕生日のお祝いにね。

良人 ひとつお願いがあるんですが。

刑事 なんです？

良人 あなたもちよつと探していただけませんか。疑ってるわけじゃないですよ、そうじゃなくって、誰にも間違いや勘違いはあるんです。もしかしたら、あなたのマフラーはこの部屋のどこかに

刑事 (言葉を遮るように良人の肩にポンと手を置いて) 残念ですがこれ以上あなたのお相手をしている暇はないんですよ。(と、そのまま良人を部屋から追い出し) ……すみません、お見苦しいところをお見せしてしまつて。

兄 いえ、こちらこそ。これをあなたにお渡ししてすぐに失礼してもよかつたんですが、つい見とれてしまつて。

刑事 (靴箱を指さし) それは確かわたしが ……

兄 ええ、わたしどもの部屋に忘れていかれた ……

刑事 そうじゃないんです。

兄 と、おっしゃいますと？

刑事 ですからその ……

兄 お忘れになったわけじゃないんですか？

刑事 ええ、グレーテさんにはお伝えしたつもりだったんですが ……、いい歳をして口下手なんでもう。

兄 そうか、それで。いえね、見慣れない新しい靴があつたんで、どうしたんだつてあいつに聞くと、ブルームフェルトさんが忘れてつたつて言うんです、だからぼくに返しに行くつてくれつて。ぼくが行くのは構わない、だけど返すという言葉は、これが贈り物、もしくは、無理矢理押しつけられたものである場合に使うべきであつて、忘れものなら「届ける」と言わなきゃいけないだつて。あいつ、田舎から出て来たばかりでしょ、だから言葉の使い方もよく知らないんで、いつもぼくが注意してやつてるんです。それで、これは贈り物なのかつて聞くと、忘れものだつて言うでしょ、じゃ、届けばいいんだなと言うと、返すんだつて言う。バカな押し問答ですよ。強情なんです、グレーテは。いい加減面倒臭くなつて、とにかくお持ちすればいいんだと思つてこうしてお伺いしたんですが ……。結局、

どうということなんでしょう、あなたがこれを忘れたわけではないということは

：

刑事 差し上げたんです、グレーテさんに。

兄 ということは？ なにかのお礼なんですか？ あいつからはなにも聞いていない

んですが、なにかして差し上げたんでしょうか、あいつがあなたに。

刑事 いえ、そうではなくて、つまりその ……

兄 なにか特別なことをしたわけじゃないんですね。

刑事 ええ、そういうことはなにも。

兄 今日はあいつの誕生日でもないし、いや、誕生日だからって贈り物をいただくほ

ど親しいお付き合いをしているわけでもありませんし。そうですね。

刑事 ええ、確かに。

兄 いったいどういうことなんだろう？

刑事 気持ちです。

兄 キモチ？

刑事 ただわたしのグレーテさんに対する気持ちを伝えたくって、それで ……

兄 はつきりおっしゃっていただけませんか。よく呑み込めないんです、ぼくの頭で

は。あなたはわたしの妹に、どういう気持ちを伝えたくってこういうことをなさ

ったんですか。

刑事 ……（俯いて、ボソツと）愛してるんです。

兄 なんですって？

刑事 （顔を上げ）愛してるんです、グレーテさんを。

兄、笑う。笑いが止まらない。

刑事 ……（俯く）

兄 失礼。

刑事 いえ、笑われるのは当然です。そろそろ五十に手が届こうかって男が年甲斐もな

くこんな …… みつともない話だっことは自分でもよく分ってるんです。もし

かしたら迷惑になるかもしれないとも思ってたんですが ……

兄 迷惑ですよ。迷惑だからこうして返しに来たんです。グレーテはまだ子どもなん

ですよ。なにが夢でどれが現実なのか未だに見分けがつかない小娘つかまえて、

いったいどうしようっていうんですか。

刑事 だからこれを差し上げたからってどうかこうとか、そんな、なにか見返りがほ

しくってこんなことをしたわけじゃないんです。そうではなくて

兄 （遮って）なにを言ってるんですか、なにをやってるんですか。あなた刑事でし

よ、いまこの街がどういうことになってるか分かってるんですか？ 一昨日の夜

にはまたひとり、今度は娼婦が射殺されたんですよ、これで五人目。いったい何

人の犠牲者を出せば気がすむんですか。犯人はもちろん、男なのか女なのか、老

人なのか子どもなのか、次はいったい誰が狙われるのかも分からないって、市民たちは皆、明日は我が身かと恐怖に震えているんです。最近夜の六時を過ぎると、駅前の大通りさえ人影もまばらという有り様じゃないですか。それなのに、この大事な時に、市民の貴重な血税を預かるあなたがひとの迷惑も省みずいい歳をして惚れたのハレたの、そんなことに現(うつこ)を抜かしているから、いつまで経っても犯人を捕まえられないんですよ。(と、激しくののしる)(注⑧)
それを言われると ……

兄 (静かに、呟くように) 妹は田舎に返すつもりです。いつまでもこんなところにいたらろくなことにならない。あいつは田舎に帰って、田舎の男と結婚をして、三人ばかり子どもを作って、そして …… 川のせせらぎや、山の緑や月や星や、優しい家族に囲まれて、ささやかな幸せを喜び、たまさかの不幸せに涙しながら、誰に後ろ指さされることもなく平凡な一生を送ればいいんです。いいきっかけを与えてくれたあなたに感謝します。

刑事 ……
兄 じゃ、これは確かにお返ししましたから。(と、鞆箱を置いて出ていこうとする)
刑事 お部屋にいらっしやるんですか。

兄 え？
刑事 グレーテさんに一言お詫びを。いえ、それだけです、ほかにはなにも。お部屋にいらっしやるんですね。

兄 いえ、さつき部屋を飛び出して行って ……
刑事 どこに行かれたんですか。
兄 さあ。

刑事 ひとりで？
兄 多分、映画でも見に行っただと思うんですが。あいつが行くところといたら映画館のほかにはどこも
刑事 (遮って) どうしてこんな時間にひとりで表に出すんだ！ (と、部屋から飛び出そうとする)

ドアの外に良人が立っていた。

良人 お話はお済みですか？

刑事 なんだと？
良人 お済みでしたらちよつとその、マフラーを

刑事 (被せて) そんなにほしけりゃくれてやる！ (と、巻いていたマフラーを床に叩きつけて出ていく)

良人 ハ、ハ、ハ。(と笑いながらマフラーを手に取り) 野暮というのか野蛮というのか、あなたもとんだ災難でしたな。いや、立ち聞きするつもりはなかったんですが、生まれつき耳がいいんでつい …… ハ、ハ、ハ。一言で言っただけですな、あい

つは。馬鹿とはつまり貴重な労力を無駄に使うということです。あんな男が刑事
っていうんじゃない、あなたもおっしゃっていたように市民は大変だ。これ（マフラー）
だって最初から素直に渡しておけば、なにもお互い大きな声を出しあうこともな
かったわけで　：違う、この手触りはわたしのモノじゃない！

兄　（咳をして）すみません、ちょっと熱があるんで　：（と、去ろうとする）

良人　ちよ、ちよっと待ってください。これがわたしのものじゃないってどういうこと
ですか？　わたしのマフラーはいったいどこへ消えたんでしょう？

兄　そんなことわたしに聞かれても　：

良人　家内に買ってもらったものなんですよ。三年前の今日、わたしの誕生日のプレゼ
ントにね。だからこれから家内に会うのにアレがないと　：、わたしがアレを首
に巻いていけば、仲睦まじかったあの頃をアレも懐かしく思い出すと思うんです、
だからその　：。そうか、やっぱりこの部屋のどこかにあるんだ、うん。すみま
せん、わたしと一緒に、いや、一緒に探していただかなくても結構なんですわ、わ
たしがひとりでアレするのもナンでしょ、だからその、証人というか　：（と、
言いながらあちこち探し始める）、いくら馬鹿だからって、まさか隠したわけでは
ないと思うんですよ、きっと自分のものと同違えて　：。馬鹿は無駄な労力を使
うが、周囲にも無駄な労力を使わせるから困る、まったく。ハ、ハ、ハ。（と、笑っ
てはいるがその眼は真剣だ）

兄は良人のその必死さにくたれたのか、黙って見ている。

7

Kの部屋。ドアのところまで妹がハ―ハ―と肩で息をしている。
奥から、水の入ったコップを持って、愛人が現れる。

妹　（コップを受け取って）ありがとう。

愛人　大丈夫？

妹　（飲み干し）大丈夫ですけど、じゃ、カールさんは？

愛人　いま出て行ったのよ、会わなかった？

妹　わたし夢中で走って来たから　：

愛人　わたしにカールからのことづけを伝えるために？

妹　すみません、座らせて下さい。（と、ソファ・ベッドにへたり込み）ということは、
ご主人とはまだ？

愛人　そうなの。待ってるんだけどなかなか来ないからそれでカールが探しに行ったの。
でも、よく考えたらふたりともお互いの顔を知らないのよ、どうやって探し出す
つもりかしら。

妹　バカみたい。

愛人　ほんとに。

妹 いえ、カールさんのことじゃなくってわたしが。こんなに疲れちゃって。
愛人 ケンカでもしたの？

妹 え？
愛人 お兄さんと。

妹 ええ、ちよっと。いつもなんです、最近は。だからもうこのアパートを出てそれ
で……

愛人 ひとりで住むの？

妹 と言うか……、レインさんはどうなさるんですか？

愛人 わたし？

妹 やっぱりウイーンへお帰りになるんでしょ、ご主人と。

愛人 ……どうしよう。

妹 決められないんですか？

愛人 向こうにいる時はこっちへ来ればいろんなことがハッキリすると思っていたわ。
でも、いざ来てみたらここからいったどこへ行ったらいいのか、それがまた分
からなくなってしまうって。

妹 カールさんはアメリカに行くんでしょ。

愛人 そうね。会った時から何度もそんな話を聞かされてるけど……

妹 レインさんがいらっしやらないんならわたし……

愛人 え？

妹 いえ、それは別にどつちでも構わないんですけど、わたしもここを出てアメリカ
に行こうと思ってるんです。

愛人 アメリカへ？ カールがあなたを誘ったの？

妹 そうじゃないんです。そうじゃなくって、さっき兄さんとケンカして、いろいろ
考えて、それで決めたんです。いつまでも兄さんに頼ってちゃいけないし、俳優
学校でアーとかウーとか、いくら大きな声を出したって埒があかないってカール
さんも言ってたし、第一、大した距離を走ったわけじゃないのにこんなに息が上
がってしまっただけ。もうぐずぐずしてはられないんです、だからカールさんがア
メリカに行くんならわたしも一緒に。

愛人 どうしてそんなにアメリカへ行きたいの？

妹 わたし、ポーラ・ネグリみたいになりたいんです。

愛人 なりたいのは分かるわ。でも、行けばどうにかなるってものでもないでしょ。

妹 だけど行ってみなければ、やってみなければ分からないでしょ。

愛人 やってみなくても分かることはいっぱいあるわ。

妹 やってみなくてあとで後悔したくないんです、わたしは。

愛人 やらなければよかったって後悔することはないかしら。

妹 ……

愛人 ごめんなさいね。意地悪でこんなこと言ってるんじゃないのよ。そうじゃなくっ
て、あなたみたいな若いひとをその気にさせたカールが許せないの。

妹 だからそれはわたしが勝手に …

愛人 カールはアメリカになんか行けやしないわ。

妹 でもおっしゃってたんです、もうすぐここを引っ越して …

愛人 むこうに友達がいるって言うんですよ。

妹 ええ、ハリウッドにも昔の仲間がって。

愛人 カールの言葉を信じちゃ駄目。もちろん、あなたを騙そうと思ってそんなこと言ったんじゃないのよ。でも、カールの言葉の三分の一は出まかせで、三分の一は希望的観測で、だから、話半分どころか、カールの話で信じていいのは三つに一つなの。おまけに、その三つに一つの真実だって三日もしないうちに忘れてしまうのよ。どこそこへ行く、どこそこに友達がいる。これはあのひとの口癖。わたしも何度も聞かされたわ。でも、カールはどこへも行かないし、あのひとのことを待ってる友達なんてどこにもいないのよ。

妹 どうしてそんな風におっしゃるんですか。カールさんが可哀そうだわ。レインさんはカールさんのこと愛してないんですか。

愛人 愛してるわ、愛しているからこんなこと …。そのひとを愛するということはそのひとを知ることですよ、知る必要のないことまで知ってしまうということですよ、違う？ あなたにはまだ分からないかもしれないけれど。

妹 嫉妬でしょ。

愛人 え？

妹 レインさんはわたしに嫉妬してるんですよ。

愛人 わたしはあなたのなかに嫉妬しなきゃいけないの？

妹 なにも出来ないからでしょ、どこへも行けないからでしょ。

愛人 わたしは夫以外の男を愛したわ。愛してしまったから家を出たわ、家を出てここまで来たわ。

妹 出ただけでしょ、家を捨てたわけではないんですよ。

愛人 あなたにいったいなにが分かるの？

妹 それくらいは分かります。

愛人 分かるはずないわ。家の中では、カーテンの向こうでゆっくりと流れ落ちる窓の冷たい水滴のように、そこにいることにさえ気がつかないほど静かなひとが、お皿を三つも置けばいっぱいになってしまうような小さなテーブルで、額と額をくっつけるようにしていつも一緒に食事をしている、あなたのいちばん近い誰かが、家の外では、どんな風にな変わって何をしてるのか、想像することさえ出来ないあなたに、わたしのいったいなにが分かるって言うの？

妹 どういうことですか、それ。

愛人 …… (つい口にしてしまったことを後悔している)

Kが現れて。

K なんだ、きみ(グレーテ)だったのか。ひとの気配がするからってつきり彼かと……。どこに行ったんだろう？ 坂上の煙草屋の婆さんに聞いたら、確かにきみ(レイン)の旦那と思しき男が来たって言うんだけど……。どうしたんだよ、ふたりとも。そんな難しそうな顔をして。なにかあったの？

妹 (愛人に) ハッキリ言って下さい、兄さんが外でいったい何をしてるんですか。ごめんなさい。(と、逃げるように奥へ消える)

K レイン！ (と、追いかけてやうとするが、妹に) なにかあったんだ。グラックスがどうかしたのか。

妹 カールさんもご存知なんですか？

K なにを？

妹 兄さんが、……。兄さんが、例えば一昨日の夜になにをしていたのか。

K グラックスが？ …一昨日の夜にいったいなにかあったんだ？ …(と、自問自答)

妹 なにか見たんですね。

K いや …

妹 見たけどよく覚えていないんですよ。

K だからいま思い出そうとしてるんじゃないか。

妹 いいんです、思い出さないで下さい、なにも！ カールさん、アメリカに行きましよう、ふたりで、ふたりつきりでアメリカに行きましよう！ (と、Kに抱きつく)

K グレーテ …

兄が現れる。

K アッ！ (と、慌てて妹を振りほどく)

兄 なにしてるんだ。

K 違うんだ。

兄 なにが違うんだ。

K そうじゃなくって。隣の部屋にはレインだっているんだから、そんな、グレーテにそんなことするはずないじゃないか。(妹に) そうだろ、ぼくはきみに何もしてないだろ。

妹 兄さん、わたし、カールさんと一緒にアメリカに行くわ。

兄 アメリカ？

K ちょっと待ってくれ、そうじゃないんだ。

妹 行くんでしょ。行くって言ったでしょ、アメリカに。嘘じゃないんですよ。

K 行くよ、本当に行くんだ、ぼくはアメリカへ。コロラドに住んでる友達と一緒にコロラドの月を見ようって約束もしてる。でも、きみと行くとは

妹 (遮って) 言ったでしょ、約束したでしょ、ふたりでアメリカへ行こうって。

K いやいや、それは

(遮って) さっきの今よ、もう忘れてしまったの。

K (兄に) ちよ、ちよっと待ってくれ。そうだ、レインに聞こう。あいつに聞けば
なにもかもハッキリするんだ。レイン、ちよっと来てくれよ。レイン！ …なに
を怒ってるんだ、あいつ …(と、奥へ行こうとする)

奥から良人が現れる。

良人 ない、どこにもない、どこに消えたんだ、わたしのマフラーは …(と、言いな

がら、ドアを開けて部屋から出ていく)

K ダ、誰なんだ、いまの男は …！(と、首をひねりつつ奥へ消える)

兄 嘘だろ、カールとアメリカに行くなんて嘘なんだろ。分かっている。そうやって兄
さんを困らせたいだけなんだ。

…

兄 靴も返してきたからな。あの靴だって …、新しい靴がほしけりやほしいって兄
さんに言えばいいじゃないか、そうだろ。嫌がらせとしか思えないよ。どうして
あんな男のプレゼントなんか受け取るんだ。どうして分からないんだ、あいつの
魂胆が。 …どっちにしたってスキがあるからだよ、お前に。スキがあるからあ
んな男にあんなこと …

妹 わたしがなにも知らないと思ってるの？

兄 え？

妹 どうして使いもしないハンマーを兄さんは買ったのか。わたしが田舎の家から持
ってきた裁ちばさみがいったい何に使われて、どうして兄さんは自分の服をけっ
してわたしに洗濯させはしないのか。 …どうして？

…

兄 一昨日の夜は？ あんなにずぶ濡れになるまでいったいどこで何をしてたの？

…

妹 答えられないの？ どうして答えられないの？ レインさんは知っているのよ。
カールさんだってきつと。

K (奥から現れ) 消えてしまった。レインがいないんだ、ここへ入って行ったはず
なのに …。いや、そんなことはありえない。ドア以外に出入り口のない三階の
この部屋からレインが消えられるはずがないんだ。ということは …

K カール。

K 悪い、話しかけないでくれ、いま大事なことを思い出そうとしてるんだ。なにか、
ここから一つ一つたまねぎの皮を剥くように丁寧に解きほぐしていけば、忘れて
しまったいろんなことを思い出せるような気がするんだ。 …そうだ、おれはこ
こでこうしてレインとレインの亭主が来るのを待っていたんだ。そして、そう、
いつまでたっても来ないから、おれは痺れを切らしてそいつを探しにいったんだ、

兄 まるで鳥籠が鳥を探しに出かけるみたいにな……(と、ドアから出ていく)
グレーテ、誤解だよ。兄さんはなにもしていない。ただ、月の石を探していただけさ。月には兎が住んでいる。東洋人はみんなそう信じてるんだ。どうすれば兎が月に行けるか分かるかい？ 月の石を食べるんだそうだよ。それは、水銀のようキラキラと光っていて、触るとゼリーのようブルブルと震え、耳にあてると囁くような風の音が聴こえ、ハツカのような涼しい匂いで、口に入れると氷砂糖のように甘いというんだ。それを百八つ、そんな半端な数がいったいどこからはじき出されたのか知らないが、百八つ食べると、フワツとからだは軽くなって、満月の夜になるとかかるとかかるとか、月の光の浮橋を渡っていくことが出来るっていうんだ。まるで夢のような話だろ。

奥から愛人がそっと現れる。兄・妹はそれに気づかない。

兄 だけどあの日、たぶん鬱々と、いつものように寝つかれない兄さんの隣のベッドで、すやすやと軽い寝息をたてながら気持ちよさそうに眠っているお前の寝顔に、嫉妬と憎しみと、そして途方もないほどの愛おしさを感じた夜から数えて三日目の夕方、そんな、現実にはあるはずもない月の石をとうとう見つけてしまったんだ。まだたった五つしかないから百八つまであと何日何年かかるか分からないけど、グレーテ、兄さんはもしかすると月へ行けるかもしれない。

妹 兄さん、逃げて。

兄 逃げる？ どこへ？

妹 アメリカに行くのよ。兄さんはわたしと一緒にアメリカに行くの。

兄 アメリカに行つてなにをするんだ、なにをすればいいんだ、おれは。保険の外交でもするのか？ アメリカに行けばこの街よりもっと月の石が転がっているのか？ いったいなにがあるんだ、アメリカに！

妹 映画があるわ。逃げるのよ、兄さん。逃げられる。わたしと一緒にアメリカに行つて、手に手を取つて、兄さんも映画のスクリーンのはるか向こうに行けばいいんだわ。

兄 グレーテ ……

ふたりは激しく抱き合う。と、開いていたドアに刑事が現れ、その光景に呆然となつて立ち尽くす。

妹 (刑事に気づき) ……逃げて。逃げるのよ、兄さん！

ふたりは手に手を取つて刑事の脇を抜け、走り去る。

刑事 (まだ呆然として) ……

愛人 追いかけないんですか。

刑事 あのふたりはいつたい …

愛人 ご覧になったはずですわ、なにもかも。

刑事 ええ …

愛人 ふたりは愛しあってるんです。もしもあなたがそれを理解出来なかったとしても、わたしには笑う権利はありませんわ。だって、それはあなたが孤独で貧しくて、愛というものから見捨てられてきた証ですもの。

刑事 夜が来ると、一日が短すぎるように思える時と長すぎるように思える時がありま
すが …

愛人 ええ。今日はいったいどつちなのかしら。

刑事 さつきからそれを考えていたんですがね、こんな時間になってもまだ夕食をすま
せていないということは …

良人が入口のドアから現れる。

愛人 ヨーゼフ …！

良人 ああ、やっと会えたか。もう少し早く来るつもりでいたんだが、なかなかそうも
いかなかったってね。元氣そうじゃないか、ええつ。

愛人 どうしたの？ その手。

良人 ちよつとね、名誉の負傷だよ、大したことはないんだ、うん。さっきのいまだか
ら痛くないって言ったら嘘になるが、二三日もすれば傷痕も消えて、ここでそん
なことがあったことすら忘れてしまう程度のものさ。

愛人 だといいわね。

良人 大丈夫だよ、なんとも思っちゃいない。確かに驚いたことは驚いたんだ。でも、
数多の艱難辛苦を乗り越えてここまで来たわたしが、今回のこの程度の不意打ち
にたじろぐわけにはいかないからね。

刑事 さてと、フツの人間は飯でも食うか。

良人 ああ、刑事さん、忘れてました。これをお返ししないと。（と、マフラーを差し出
す）

刑事 差し上げたって言ったでしょ。

良人 いやいや、そんな。ハ、ハ、ハ。（と、笑って愛人に）似てるだろ、ホラ、お前が
三年前の誕生日にわたしにくれたものと。（と、それを首に巻き）でも違うんだよ、
これはお前がわたしにくれたものじゃなくて …

刑事 そう。奥さんがわたしにくれたものなんですよ。

良人 （驚いて）そ、それはどういう …？

刑事 孤独で貧しくて、か。フン、愛なんぞそこいらの野良犬にでもくれてやるさ。（と、
ドアから去る）

良人 （笑って）とんだお笑いだ。あんなコレラ菌みたいな男とこのわたしが、ひとり

の女から贈られた同じマフラーを首に巻かなきゃいけないんだなんて。

愛人
なぜそのマフラーを買ったのかしら。忘れていたの。でも、なんとなく懐かしい
気がして……。いまあなたがそれを首に巻いたのを見てやっと思いついたわ。何
年前前には寒くなるというもあなたの首に巻かれていたものと、それは同じもの
なんだってことを。ほんとにお笑いね。(と、笑う)

良人
なにがそんなにおかしい！

愛人
わたし、これでやっとなんかを始められるような気がするわ。

良人
レイン、生まれてこの方、わたしはこんな屈辱を受けたのは初めてだよ。許せな
い。わたしは我慢出来ても、こんな信じがたい裏切りはわたしのこの手が許さな
い。

愛人
どうなさるの？

良人
決まってるじゃないか。だから……

Kが戻って来る。

K
レイン！　なんだ、ここにいたのか。(良人に気づき)　こちらは……？

愛人
そう、ヨーゼフ。

K
どうも、初めまして。カールです。(と、右手を差し出す)

良人
(睨んで)……

K
ああ、そうですね。ぼくたちは握手を交わしあうようなアレでは……

愛人
カール、話はすんだわ。行きましょう。

K
行く？　どこへ？

愛人
どこでも構わないわ。

K
レイン、ダメなんだ。ぼくはどこへも行けない。

愛人
カール……

K
思い出したんだ。ぼくが忘れていた肝心要のところをやっと思いついたんだ。

この街は人間の脳と同じ原理で出来ている。脳の中をまるで網の目のように細く
小さな血管がうねうねと走っているように、この街の小さく曲がりくねった無数
の路地の複雑さときたら、保険の外交の仕事に就いてもう八年、新規の客を探し
お馴染みの家を訪ねながら、来る日も来る日も休むことなく歩き続けてきたお陰
で、夏になるとどこの家のベランダにどんな鉢植えの花が咲くのかさえ、すつか
り手の内に入ってるあのグラックスでも、時として見知らぬ袋小路に迷い込んで
しまうことがあるほどだ。そう、人間の脳の中の考えを迷わせるように、そんな
奇妙なこの街の一角を占める昼なお暗いこのキテレッツな部屋のせいで、ぼくはき
つと、忘れるはずもない恐るべき大事件を忘れてしまっていたんだ。

愛人
なんなの？　その恐るべき大事件って。

K
そ、それは……

愛人
カール！

K
嘘じゃないんだ！
愛人 信じるわ。だから …

奥から、手に包丁を持った刑事が現れる。

刑事 申し訳ないがみんな出て行ってくれないか。そろそろ食事にしたいんだ。いつものようにひとりで静かに食べたいでね。(と、言っ、戻ろうとする)

良人 おい、こいつらを捕まえる。

刑事 なんだと？

良人 亭主のいる女が亭主以外の男と密通したんだ、捕まえる！

刑事 俺に触るな！ 腹が減ってるんだ、俺に触ると命取りになるぞ。(と、奥に消える)

K いったいどこなんだ、この部屋は！

愛人 カール、大丈夫よ。(と、カールの手を取って) わたし信じるわ。だからハッキリ言っ。あなたが忘れていた大事件で言ったいなんなの？

K 自分でもにわかには信じられないんだ。でもこれは本当なんだ。

愛人 カール！

良人 おい、刑事、あんなことしてるぞ。亭主の目の前で、女房がよその男と乳繰り合ってるんだぞ。貴様、こんな不法行為を見過ごしていいと思ってるのか！ (と、奥へ怒鳴り込んでいく)

「ウツ！」という良人の悲鳴。そして、ドスンと床にモノが倒れこんだ音！

K (愛人と顔を見合わせ) どうしたんだろう？ (と、奥へ行こうとすると)

刑事 (血塗られた包丁を手に現れ) 奥さん、いまの音、聞こえたかな。どぶ鼠の腹を引き裂いたんじゃないぜ。あなたの亭主だよ。スープの中に髪の毛が入ったみたいの不愉快だったんでね。(注⑨)

愛人、奥へ消える。

愛人の声 (奥から) ヨーゼフ …

刑事 まるで犬のように死にやがった。

K あらゆる言葉は魔法の呪文だ。言葉は行為の先ぶれだ。ああ、この世の中ではなんだって起きるんだ！ (注⑩)

カールの部屋。カールはひとり、椅子に座ってトランプで遊んでいる。
ドアが開いてグラックスが現れる。

兄　ひとりかい？
 K　他に誰がいるんだ。
 兄　やっぱりいいね、女の匂いがしない部屋っていうのは。
 K　遅いよ。待ってたんだぜ、ずっと。
 兄　悪いけどもうきみと遊んでる時間はないんだ。
 K　分かってるよ。アメリカに行くんだろ。
 兄　だからお別れに来たんだ。
 K　淋しくなるなあ。
 兄　友だちが怒ってるぜ、きつと。
 K　友だち？
 兄　あんたとコロラドの月を見ようって約束した友だちだよ。あんた、アメリカへは
 K　行かないんだろ。
 兄　行けないんだ。
 K　ひとをその気にさせておいて　…、信じられないよ。
 K　だから、その話をしようと思ってる。
 兄　その話？
 K　ずっと忘れていた重大なことをやっと思いついたんだ。
 兄　へえ。
 K　なんだと思う？
 兄　なんだろう？　あの日の夜のことかな？
 K　あの日の夜？
 兄　その坂の上で娼婦が殺された夜だよ。見たんだろ？
 K　ああ　…。確か、ピストルの音が聞こえて、しばらくすると雨の中をきみが坂の上から駆け下りて来たんだ。もちろん、それは奇妙な光景だったからレインとあれこれ推測もしたよ、もしかしたらきみが　…、ってね。でも、そうなのかい？
 兄　そうなんだ。あんたがハンマーを使い、ナイフを使い、ハサミを使い、ピストルを使って観客の目をあざむき心を奪うように、僕もハンマーを使い、ナイフを使い、ハサミを使い、ピストルを使って　…
 K　分かった、分かったよ。でも、いまとなってはそんなこと、もうどうだっていいんだ。
 兄　どうなってんだ、あんたの頭は！
 K　だから、もつと大変な、肝心要を思い出したんだよ。あんたなら信じてくれると思うんだが　…

兄　なんだよ、いったい。
K　ここだけの話だぜ、ほかの誰にも内緒だぜ。
兄　だからなんだって。
K　聞いて驚くな。本当のことを言うと俺はとつくの昔に、(小声で)死んでいたんだ。
兄　…？　なんだって？
K　ふん、驚いてるな。
兄　あんたはとつくの昔になんだって？
K　俺は死んでたんだ。それをずっと忘れていたのさ。
ふたり、いかにも愉快そうに笑う。

兄　ごめん、笑うようなことじゃなかった。
K　いやまあ、それはそうなんだけどね。
兄　そうか、だからアメリカへ行けなくなっただんだ。
K　のんきに旅なんかしてる場合じゃないんだよ。だって俺は死んでるんだから。でも実際のところ、死んでるはずなんだけどどうも死んだ気がしないんだよ、自分では。
兄　分かるような気がする。

K　この期に及んでみっともない話なんだが、俺も初めての経験だからさ。
兄　僕に何かできることがあればいいんだけど　…
K　いまの話を聞いてくれただけで十分さ。
兄　もうお別れだ。

グラックス、ピストルを抜く。

K　それは？
兄　自分以外の人間の血が溢れ出るのを見ると、僕はまるで翼を与えられたような気分になるんだ。(注⑩)
K　(苦笑して)よせよ、俺はもう死んでるんだぜ。
兄　嘘つきだからな、あんたは。
K　そうか。あんたは怒ってるんだ、俺と一緒にいかないからって。
兄　多分ね。

グラックス、いきなりカールを撃つ！　銃声を合図に中天に大きな月が出る！

K　(くしゃみして)ああ、冷えるな、今夜は。
兄　あれは？！
K　コロラドの月だよ。俺は嘘はつかない。

兄 カール …
K グラックス、あなたはアメリカに渡って芸人になるんだ。いまの呼吸を忘れるな。
さてと、友だちとの約束もこれで果たせし …

と呟いて、カール、ぼったり倒れる。

兄 (駆け寄り) カール!
K グラックス、今夜からこれでぐっすり眠れるよ、きつと。
兄 そうなるといいんだが …
K おやすみ。
兄 おやすみ、カール。ぼくはアメリカに行くよ。アメリカに行って …、そうだ、
あんたのような、芸人になるんだ …。

おしまい

注一覧

S 1

注① F・カフカの短編「夢」を参考。

注② カフカの言葉。おそらく日記か手紙に書かれたものかと思われるが、不明。

S 2

注③ 妹のこの件での映画に関する台詞は、淀川長治・山田宏一・蓮實重彦・著「映画千一夜―夜―(中央公論社・刊)を参照・引用している。

S 3

注④ F・カフカの短編「中年のひとり者ブルームフェルト」を参考

S 5

注⑤ F・カフカの小説「審判(訴訟)」に登場するレーニを参考。

注⑥ 池内紀・著「恋文物語」(新潮社・刊)の中の「プラハの殺人者ヨアヒム・オアスリー」を参考。

注⑦ 注②に同じ。

S 6

注⑧ 注⑥に同じ。

S 7

注⑨ F・カフカの作品集「観察」の中の「不幸であること」より一部を引用。
注⑩ 注②に同じ。

S 8

注⑪ F・カフカの作品集「観察」の中の「兄弟殺し」より一部を引用。